

如浄禅師の画像をめぐる

——宗学思想史研究序説・その十三——

東 隆 真

宝慶寺（福井県大野市所在）の寺伝によれば、中国より帰化して道元禅師の会下にあった、同寺開山・寂円（一二〇七？～一二九九）の将来とされる天童如浄禅師（一二六三～一二二八）の肖像一幅が秘蔵されている。

この肖像画について、宗門一般では、宝慶寺の寺伝を承認して、格別の異見が出ていたのではないが、曾つて学界では、ふたつの対立する見解が提出されたままになっている。

それは、これは如浄の真像に非らずとする大久保博士の説と、寺伝ならびに面山説を支持して真像であることを主張する故伊藤慶道氏の説である。

とくに伊藤氏は、その著「道元禅師研究」第一卷（昭和十四年・大東出版社刊）で「天童如浄禅師頂相の研究」と題する項目を設け、三十七頁にわたる紙幅を割いて、綿密な考証を展開し、宝慶寺本如浄禅師頂相こそ、かの国宝道元禅師祠書一幅と共に、如浄禅師生前の風格を伝える唯一無二の遺品と言ふべきものであって、最も崇敬に値する宗宝であると結論している。

私は、宝慶寺の如浄禅師肖像を直接に拝見する機会に浴していないし、禅宗の祖師像に関する専門的知識をなんら持ち合わせていないので、いまかれこれ論ずる資格のない者である。ただ、寂円の行歴（拙論「寂円の家風とその特色」・印度学仏教学研究第十七卷一号・昭和四十三年十二月）を文献的に整理してゆく研究の過程において、寂円将来と伝えられる如浄の肖像画に関する大久保、伊藤の両説に逢着した。この問題を暫らく熟考しているうちに、私なりの疑問が湧出したのである。それは文字通り素人の疑問の域を出ないものであるが、私自身の後日の研究課題として、いま覚え書きをしたためておきたい。

とりあえず、はじめに大久保、伊藤両氏の見解を要約してみる。

大久保博士は、「道元禅師伝の研究」（一八九一～一九一頁・昭和二十八年三月・岩波書店）において道元禅師が如浄から芙蓉道楷の法衣、宝鏡三昧、五位顯訣、自贊の頂相を併せ授けられたという建誓記の記事をとりあげ、なかに如浄自贊の頂相に触れて、宝慶寺所伝の如浄画像にも言及



伝天童如浄肖像 福井県宝慶寺蔵

している。即ち、道元禪師が如浄の自賛の頂相を授与せられたことは、

当時の宋国禪林で嗣法の標準とする風習にもとづくもので、本師の肖像を携え帰ることは当然であり、妥当とみななければならないが、この自賛の頂相のその後の伝承は全く不明であるとのべて、次のように書いている。

『「本光国師日記」 第四慶長十六年五月の条には、永平寺に浄祖自賛の御影のあったことが見えているが、これは恐らく今の禪師将来のものとは別本で、昔から宝慶寺に蔵していた「伝如浄禪師画像」を指したものと思う。この画像はその係賛にもあるように、智琛（宝慶寺の開山寂円の別名だともいわれている）の求めによって与えたもので、与えた

禪師画像」と題して、この宝慶寺所伝本について意見の一端を掲載した

ことがあるが、その後になって、伊藤慶道氏がその著「道元禪師研究」

第一巻において、この説を反駁し、それが浄祖の真影であると主張せられた。（中略）私としては、そのような反駁よりもむしろ該画像そのもの

について、それがどうしても浄祖の真影でなければならぬという確固たる史料を提供して欲しかった。つまり寺伝というがごとき先入主的觀念を離れて、純粹に画像そのものを中心として見た場合と、そして画像以外の側面的な史料によった場合との二方面からの論証が望ましかった。いずれにしてもこの宝慶寺の画像は、禪師が将来せられた浄祖の頂

人は天童山の住持であったに相違ない。しかしながら、それが果して浄祖の画像であるかどうかは、寺伝以外に確める方法がないから、それに就いてはなお研究の余地が存している。少くとも智琛の人物が判然しない限り、いかに「太白」の自署があっても、これを積極的に浄祖の頂相と断定することはできない。私は嘗て昭和十三年四月、中外日報紙上に「誤られたる明極楚俊

相ではなく、全然別個のものであるといわねばならぬ。』

次に、伊藤氏は、永平寺第三十一世大了愚門和尚の校訂に係わる永平紀年録卷末附録余の「天童俊明極与三宗可一語」という文献の一節をみると、この宝慶寺本如浄頂相自賛の語と全く符合する一節があり、しかもこれが明極楚俊の語とされているが、これを根本資料として、宝慶寺本如浄の頂相自賛の語は明極楚俊の頂相であるとする一部の学者の説を難じている。いま、この一部の学者の説とは、察するに、直接にはさきの大久保氏の中外日報の記事を指すのであろう。

伊藤氏は、永平紀年録卷末附録余の「天童俊明極与三宗可一語」の内容

批判に及んで、まず、明極楚俊は天童山景德寺の住持となった経歴はないこと、次に、明極に宗可が謁したのは婺州雙林山であつたこと、次に、この法語は智琛に直授したもので宗可に与えたものではないこと、の三点から、この附余の法語は、この永平紀年録が刊行せられた元禄の頃より約七十年前後の当時において、永平寺に誤られた如浄の頂相があつたこと、当時の明極楚俊の盛名は宝慶寺所伝の如浄頂相に対する正當な認識を欠いて、なんらかの必要上これを明極楚俊に結びつけようとした後人の仮作であると論証した。

伊藤氏は、宝慶寺所伝の如浄頂相が正しく如浄の頂相であると考え



天童如浄肖像 岡崎正也氏蔵<大久保道舟「道元禅師伝の研究」より>

理由として、その来歴と画像の様式、自賛の書跡、賛語の内容などから自説を主張するのである。伊藤氏によれば、宝慶寺本如浄頂相は道元禅師在世中に寂円即ち智琛が将来したものであるという口伝が宝慶寺に伝えられているに過ぎないのは遺憾であると認めながらも、面山の「天童如浄禅師行録聞解」が宝慶寺伝をそのまま伝えていることを重視し、これを無視するのは篤学

の人面山を冒瀆するものであるといひ、また本光国師日記第四・慶長十六年五月の条の記事は、曹源寺見龍が宝慶寺什宝取戻しの件につき、五月二十二日附を以て板倉伊賀守、余地院、円光寺に宛てた訴願状であるが、そのなかの什物の一つとして、如浄自賛の肖像が挙げてあるのは、徳川初期の慶長十六年当時、如浄自賛頂相が宝慶寺の什物として公認されているから、そのはるか後代の面山が虚伝をねつ造したということはないとするのである。

ついで、宝慶寺の如浄頂相にみられるその様式が、京都東福寺所蔵無準師範頂相、京都大徳寺所蔵虚堂智愚頂相と著しく類似し、また本頂相の絹地は、鎌倉末期より室町初期のものと見られる岡崎氏所蔵の如浄頂相と比較して、鎌倉中期、即ち中国南宋時代に用いられた絹地であろうとする。また、その自賛の書体は、さきの無準師範頂相自賛、鎌倉建長寺所蔵大覚禪師頂相自賛、京都妙光寺所蔵無門慧開頂相自賛などにみられる筆格と同じ時代的特色、即ち寒灰古木しかも豪健雄快の筆致をもっており、如浄の寂後約百年の明極楚俊の墨跡と類似していないという。また、自賛の語の内容は如浄のものにふさわしく、如浄語録の言葉と同巧異曲であり、かつ、この賛語のなかに梅花の文字が使用されてあるのは、梅花を愛好した如浄の作と見てならさしかえないという。以上が、伊藤氏の主なる論旨である。

因みに、実際に拝見せられたであろう伊藤氏の解説によれば、宝慶寺所伝の如浄頂相というのは、絹本着色である。その絹地の縦横の線はともに不正であり、絹糸にも太い個所と細い個所とが混じている。原寸縦

三尺四寸九分、横一尺五寸七分、軸は縦五尺七寸二分、横二尺二寸二分である。尊像は、曲縁上に坐して、手に松子もち、袈裟は八角の環を着け、その法衣は条は青緑色で地紋があり、葉は壊色の紋沙の如を用いた、いわゆる六祖以後にみられる正規の伝衣である。

その箱書によれば、明治十三年宝慶寺住持戒麟の代に表装を改めたので、もとの表装は分らないが、徳川中期に一回補修を経ていることが、その表装の一部に使用されている古金襴の布地から推測される。

この頂相の上部には、如浄自賛の語として次の如きがしたためられていると伊藤氏はのべている。

坐断乾坤全身独露

喚作本師和尚

当甚冬瓜茄瓠

更好笑

金剛倒上梅花樹

徒弟智琛乞語 太自(ママ)(示之)

(東注。太自は太白の誤り。おそらく校正漏れであろう。)
右の通りの三十八文字があつて、縦一尺一寸二分、横一尺三寸五分の間に収められ、文字は大なるもの縦一寸六分、横八分、小なるもの方一寸位に書かれてあるという。

大久保、伊藤両氏における宝慶寺所伝の如浄画像についての見解は、以上の通りである。

いま、これによって両氏の論点の交錯する個所を指摘すると、大久保氏は宝慶寺所伝の如浄画像は、実は明極楚俊画像であると言うべく、かりに如浄自賛の頂相であるとしても、その賛語に見える智琛がなにびとであるか、寂円であるかがはっきりしない限り、積極的に如浄の頂相であるとは断定できないのである。また、伊藤氏は、永平紀年録の記事を大久保氏とはまったく反対の立場から批判的にこれを拒け、更に進んで画像の様式、書体、自賛の特色をあげて寺伝を再確認した結論になっている。

この宝慶寺所伝の如浄の画像をめぐる大久保、伊藤両氏の見解において、私が疑問としておきたいのは、

第一に、いわゆる永平紀年録にみられる「天童俊明極与ニ宗可ニ語」についてであり、第二に、宝慶寺の如浄頂相の画像そのもの及び智琛の語についてである。

第一の点であるが、伊藤氏の言われる通り、永平紀年録卷末附録余の「天童俊明極与ニ宗可ニ語」と明極語録の当該箇所とは、たしかに著しく類似している。永平紀年録を信頼すれば大久保氏の見解ももっともな主張であり、これを明極語録と対比した伊藤氏の考証もまた十分な根拠をもつ学説であると言わねばならない。ここに両書の本文を対照的に揭示してみれば、次の通りである。

天童俊明極与ニ宗可ニ語八永平紀

日東可禪人同郷八明極和尚語録

年録

(A) 後醍醐帝嘉暦丙寅、永平五世

義雲禪師子可侍者、南遊觀光後、

遇ニ太白楚俊一露ニ一斑一、先レ是、

置ニ元師位牌於天童南谷菴浮和尚塔所、

歲月淹歴牌朽壞焉、可不レ憤、刊レ

牌一新、以遂ニ追遠之志一、見住楚

俊嘉ニ其志一、出ニ筆語ニ為賜曰、

(B) 四明太白峯下有ニ南谷菴一、廻

前住浄和尚藏骨之塔所也、

浄和尚夜夢与ニ洞山悟本大師一相見

翌日元公来

果知ニ悟本之後身一也

元公深明ニ洞山密旨一、

浄将ニ芙蓉楷祖所レ伝法衣竹篋白扠

宝鏡三昧五位顯訣ニ密授ニ与元公一、

公得ニ此信一竟帰ニ日東本国一開ニ山

永平寺一、

興ニ隆洞上一宗之旨一、

自レ是元禪師道望重ニ於東国一、

示寂後復立ニ位牌於南谷祖堂一、

歴年既久幾乎毀裂、

今直下子孫有宗可禪人者遯ニ海遊レ

唐不レ忍レ見ニ其祖牌已滅一、

浮和尚塔所

四明太白峯下有ニ南谷庵者ニ廻天童

浄和尚藏骨之塔所也、

浄和尚夜夢洞山价禪師相見

次日有ニ禪者元公来一

深明ニ洞上宗旨一

浄即將ニ芙蓉楷祖所レ付法衣竹篋白

扠宝鏡三昧五位顯訣ニ密授ニ与元一、

元公得ニ此法一竟帰ニ日東本国一開ニ

山永平禪寺一、

興ニ隆洞上一宗之旨一、

從レ是元禪師道望重ニ於東国一、

示寂之後復立ニ位牌於南谷祖堂一、

歴年既久損ニ滅其牌一、

今直下子孫有宗可禪人者遯ニ海遊

唐不レ忍レ見ニ其祖牌已滅一、

乃發_二大心_一命_レ工刊_レ牌入_二祖堂位_一、

自_レ非_レ悞_二念祖宗之名泯_二滅於唐_一、亦且隆祖之意切切焉能至此、

可_レ謂洞宗下不_レ乏_二鳳毛_一、原夫廻祖元公既受_レ法回_二本國_一、

是符_二契大法東漸之識_一、

宗可禪人遍參_二大唐諸禪德_一、

必亦有所_レ印授、

若有便請呈_二露老僧_一看、是与_レ僞

証拠不是与_レ僞刻卻、

可即展_二兩手_一曰是什麼、

余故然_レ其機

仍書以為贈

又、徒弟智琛乞_レ語乃云、

坐斷乾坤_一、全身独露、

喚作_二本師和尚_一、

当_二甚冬瓜茄瓠_一、

更好笑

金剛倒上梅花樹、

泰定丁卯秋七月望日、太白閑房老僧、

楚俊書、

乃發_二大心_一命_レ工刊_レ牌入_二祖堂位_一、

非_レ悞_二念祖宗之名泯_二滅於唐_一、亦且隆祖道之心切切焉、

可_レ謂洞宗之下代不乏賢也、原夫廻祖元公既受_レ法回_二本國_一、

是符_二契大法東漸之識_一、宗可禪人

遍參_二大唐諸禪德_一、

必亦有所_レ印授

若有便請呈_二露与_二老僧_一看是則与_レ

僞証拠不是与_レ僞刻却、

禪人即展_二兩手_一示_レ余是什麼故、然

其機捷而且当、乃書以為贈云、

(C) 俊明極、本朝元亨辛酉受_二朝

聘_一来、応_二建長之命_一、先_二泰定丁

卯_一巳七年、今觀_二出書於太白_一而

与_レ可書_二泰定丁卯_一、則明極之不_レ

終_二千吾國_一可_レ知、想主_二巨福_一不_レ

幾、回_レ西踵_二董天童_一也、

又可繪_二乃師義雲壽像_一、需_二支那

名納之系詞_一、淨慈芝靈石靈独孤明

為_レ之贊、義雲亦自贊、略_二于茲_一、

ところで、ここに甚だ興味深い史料がある。それは、かの現行本「永

平高祖行狀建擲記」(天正十七年・瑞長亨) 天文本(昭和三十七年・小川靈

道編) に記録する文中の一節である。やや繁雑に過ぎるが、これを次に

転載しておかねばならない。

(1) 中興(東注。義雲を指す)之真持シテ渡唐アル宗可侍者、天童南谷庵ニ永

平初祖ノ牌ヲ祖師堂ニ立テタルカ、年月ヲ経テ尽クフリタルヲ見テ、

大願ヲ起シ御位牌ヲ改テ重テ立テ給、其支証ヲ天童住持楚俊ト申長老

書セ給テ、カノ宗可侍者ニタヒテ日本エ渡ス、其書云、

(2) 四明大白峯下有_二南谷庵_一者、廻天童淨和尚藏骨之塔所也_レ淨和尚夜夢_二

洞山价禪師相見_一、次日有_二禪者_一元公来明_二洞上宗旨_一、淨將_二芙蓉楷祖所付

法衣竹篋白仏宝鏡三昧五位顯訣_一、密授与_二元公_一得_二此法竟_一、帰_二日本國

開山永平禪寺_一興_二隆洞上之一宗旨_一、而從_レ是元禪師道望重_二於東國_一、示寂

之後復立_二位牌於南谷祖堂_一、歷年既久、損_二滅其牌_一、今直下子孫有_二宗可

禪人者、逾海遊唐、不忍見其祖牌已滅、乃發大心、命工刻、入牌於祖堂位、惟非憫念祖宗之名、滅於唐、亦且隆祖道之心切々焉、可謂洞宗之下代不_レ乏賢也、原夫廼祖元公既受_レ法回_二本國_一、是符契大法東漸之識、宗可禪人遍參大唐諸禪德、必亦有_レ所印授、若有便請呈露与_二老僧_一看、是則与_二爾証契_一、不是与_二爾刻却_一、禪人即展_二兩手_一示余云、是什麼故然其機、契而且当乃書以_レ為贈云、泰定丁卯秋七月望、大白閑房老僧楚俊書、

坐斷乾坤、全身獨露、喚作_二本師和尚_一、甚、冬瓜茄瓠更好笑、金剛倒上梅花樹、

徒弟智琛乞語、

(3) 此正本ハ賀州大乘寺ニアリ。(同書四四—四五頁)

この建擧記の記事で、いま私が傍点を施したうちの(2)の部分は、さきの明極録と一致し、また、紀年録の(6)の部分に共通していることは、一見して明瞭である、なお、詳細に語句を対比すると、建擧記の「四明大白峯下有南谷庵者」から「契而宜当乃書以_レ為贈云」までの、つまりほとんど大部分の文章は明極録の全文と全く一致していると言ってよいが、建擧記の(2)の最後部の傍点を付した部分は、明極録には見えないものであって、即ち、紀年録の(6)の最後部に類似するところがあるのである。

周知のとおり、「永平仏法道元禪師紀年録」は延宝六年(一六七八)正月に永平寺第三十一世、寂円派第二十八代、大了愚門が編集したものを元禄二年(一六八九)四月に上木した道元禪師の伝記史料である。さきに紹介したが、伊藤氏は、本書の末尾の「天童俊明極与_二宗可_一語」は

明極録と宝慶寺本如浄画像自贊の語句とを附会した後人の仮作であろうと断じている。然し、紀年録の原型は、前代の天文本建擧記に見られるのであるから、大了愚門その他の創説、仮作であるとは言えないであろう。多少の語句の異同はあるものの、全体としては、紀年録は建擧記の所説を採用したと判断してよいであろう。

しからば、その建擧記の記載事項は何を材料としたのか。建擧記の(3)の部分に、その正本が大乗寺に在ると但し書きをしてあるところからすれば、大乗寺所蔵の正本に基いて収録したのであるから、建擧の独断的な自説を羅列したのではないと信じたい。然し、建擧記のこの記事を寸見して、これを文字通りに一読すると、泰定丁卯年七月、太白峯天童山景德寺の明極楚俊が、徒弟の智琛の求めに応じて法語を与えたと解釈される。だとすると、寂円下直流の法孫、永平寺第二十世(第十四世?)建擧は(一四一六—一四七四)宝慶寺所蔵の如浄頂相およびその自贊との関係をどのように理解していたのだらう。建擧の当時、いわゆる宝慶寺所伝の如浄頂相は現存していたのであらうか。現存していたのであれば建擧がこれを知らぬわけはなく、一言も閑説しない道理がない。建擧記には、この間の消息に一言半句も触れるところがないのである。従って、この点からすれば、いま紀年録即ち建擧記に照らして、現在の宝慶寺本如浄頂相自贊をみると、それは如浄に非ずして、明極楚俊の頂相自贊であらうとする大久保説はうなづかれるのである。

しかし、それは一応はうなづかれるというべきであって、やはり疑問は残る。なぜかと言えば、これはそもそも義雲の使者・中庭宗可に明極

楚後が与えた文書であるから、宗可禪人が語を乞うとなすべきであつて、智琛が語を乞うとあるのは不自然である。にも拘わらず、徒弟智琛乞語と書いてある。宗可に智琛の別名があることは記録史料に見当らず、仮りに宗可即ち智琛であるとしても、宗可は楚俊の徒弟ではないのであるから、徒弟の語はすこぶる乱暴な冠称である。つまり、建徳記と記年録の傍点の部分とその前文との文派は、自然に連結していない。この点では、二種の文章を糅合したとも解釈されるのであつて、そのような意味から、伊藤氏の所説も半分の道理を見出すことが出来るのである。

第二の点であるが、さきほどからしばしば見うける智琛の語である。

智琛とはいったい誰を指すのか。面山は、宝慶寺所伝の如浄頂相は寺伝の如く、その弟子寂円が将来した如浄画像であるとの前提から、智琛は寂円が如浄に剃度された時の名前であると決定した。（面山広録第二十四巻は「天童浄和尚真贊考」と題してのべている。その一節によると、如浄の真贊ではなく、明極楚俊の真贊であるとする説が宗門の一部に行われていたことが認められる。曹洞宗全書語録三・七七六頁）けれども、この面山説を裏付ける史実は皆無である。私は、智琛即ち寂円とする勇氣に欠ける。かりに一步をゆずつて、この種の頂相自贊が、伊藤氏も強調するように嗣法の証明である（同氏著、前掲書、一七七一頁）ならば、寂円は如浄の法嗣であることになる。然し、それを証明する記録はなにもないし、二十歳前後の寂円が如浄の法嗣であるとするのは、いささか常識的ではないであろう。

けれども、私は別の機会に述べた（前掲拙論「寂円の家風とその特色」）

ように、如浄の影響を脱却しきれなかった寂円の家風からして、寂円が如浄の頂相自贊を携帯していたとする寺伝を、寂円その人にとって洵にふさわしい伝承として、これを信頼したい衝動に駆られるものである。

次に、これは宝慶寺所伝の如浄頂相の写真版を拝見しての卒直な感想であるが、この画像は、道元禪師の伝えられる如浄の印象と比較して相当の違和感をおぼえる。たとえば、この画像で、如浄は頭髮を蓄え、その風貌まことに温厚柔和、なんとなく微笑をふくんだ面相である。しかるに、道元禪師によれば、『先師古仏、ふかくいましめのことを、天下の僧家の長髪長爪のともからにたまふにはく「不会浄髪、不是俗人、不是僧家、便是畜生、古来仏祖、誰是不浄髪者、如今不曾浄髪、真箇是畜生」（正法眼蔵洗浄）とあつて、長髪長爪を蓄える僧家に対して、これを畜生呼ばわりする如浄の教示を伝えている。正法眼蔵の如浄が、いかに道元禪師によつて眺められた主観的印象であるとは言え、いまそれが事実を歪曲した記録である訳がなく、またその必要もないのである。かの呂瀟は如浄禪師語録序文中に「惟天童浄禪師、不_レ流不_レ倚兼而有_レ之、自成_二一家_一、八面受_レ敵」とのべているが、このような個性的で秋霜烈日の如き如浄の人柄を、この画像からうけとめることはやや困難である。もとより、これは私一個の単なる感想にとどまる。永いあいだ宗門に如浄頂相自贊として伝承護持されてきたこの画像を評するにあたって、不遜のそしりを免れえないことを十分に承知しているものであるが、同時に、もし他人の画像が誤つて如浄頂相に擬せられてきていたのであったとすれば、浄祖に対する罪過はなにをもつて報いるべきである

うか。それとも、浄祖を追慕する法孫の赤心をくみとって、泉下の浄祖は苦笑してこれを許し給うであらうか。

以上、冒頭に断ったとおり、これは寂円の将来と伝えられる宝慶寺所伝の如浄頂相およびその自賛に端を発する、私の素人的な疑問にすぎない。私個人の感情を言えば、寂円が如浄画像を将来したことが事実であってほしいのである。現段階では、遺憾ながら、その裏付けの史料に乏しいことを指摘する結果になったことは、不本意ながらも自認せざるをえない。

附記

伊藤慶道氏によれば、如浄禅師語録卷下自賛の部を検すると、如浄生前にその自賛の頂相が数くとも四幅以上存していたことを推定できるといふ。

現存の如浄頂相は、東京岡崎正也氏所蔵、永平寺所蔵、宇治興聖寺所蔵および宝慶寺所蔵の四本である。

このうち、永平寺、興聖寺の頂相は、いづれも徳川初期またはそれ以後の造頭に係わるもので、宝慶寺本を複製、模写したものと判定する。即ち、興聖寺本は慶安二年（一六四九）同寺中興の万安英種が、現在地に高祖初開の道場を復興された以後の造頭であるとなす。また、永平寺本は、道元禅師が如浄から授けられた建誓記その他の所伝の頂相は紛失し、つぎに天童宏智の像が誤伝されていた（面山撰、明和版訂補、浄禅師語録事略）ので、それ以後の造頭であると推察している。

岡崎氏所蔵の如浄頂相は、絹本着色、縦一尺四寸、横七寸八分の小幅で、次のような清拙正澄（一二七四—一三三九）の係賛がある。

玉殿簾垂向奉時、九苞祥鳳啄神芝

千尋太白深如澱、劫外金梭度一絲

天童長翁禅師遺像

嘉暦元年丙寅 真浄清拙正澄敬賛

尊像は叉手当胸の半身像で、袈裟は八角の環を有し、その条は青緑色で地紋

あり、葉は壊色の黄色の紋沙の如きものを用いて、宝慶寺所伝のそれとその体裁は著しく異なっているという。清拙の賛語は、来朝後間もない嘉暦元年（一二三六）八月、即ち如浄滅後約百年のころ、博多においてなされたもので、その真筆としては現存最古のものであらう。そこで、岡崎氏は当時ならかの原本によってその半身像を描き、たまたま新渡来僧として名高いこの清拙にその係賛を請うたもので、その原本は宝慶寺本のほかに求めることができないと推定している。それゆえ、伊藤氏は現存の三本ともに、その原本は即ち現存する宝慶寺所蔵の如浄頂相であるという。然し、伊藤氏の宝慶寺本原本説は一個の臆断とも思われるのであって、その論証は必ずしもわれわれを納得させきらない弱みがある。

本論でのべたとおり、私は宝慶寺所伝の如浄禅師画像は、これを真像と決定する文献史料のないことを、はなはだ残念におもふものである。したがって、結果として、どちらかと言えば、大久保説を支持するかたちになってしまったが、然し、大久保説を採って、これは明極楚俊の画像であると断定する者でもない。もし、宝慶寺所伝のものが、真像であるとの積極的な証明が得られるならば、私の疑問は一掃されるであらう。むしろそうあってほしい気持ちが胸中にうづくまっている。かさねて、一言する次第である。